



世界の先頭を走る 日本の段ボール

レンゴ―社長 大坪 清

先日、ウィーンで世界の段ボール産業の経営者が集まる国際会議があり出席した。

世界の段ボール生産量は、2011年に2001億平方メートル初めて2千億の大会に乗った。年率5%程度で伸びており、段ボールは世界的に見ると成長産業である。新興国では経済成長で豊かになると物の流れが増える。また、先進国でもIT化などで経済構造が変化しても、物が動く限りその輸送に欠かせない段ボールの消費は伸びる。わが国でも昨年131億平方メートルと前年比1%弱伸び、今後とも1~2%程度の伸びが予想されている。同時開催された欧州の段ボール団体の総会で面白い議論を耳にした。段ボール産業のこれからの課題とする次の3つの言葉である。

1つ目は、「From Recovery to Recycle」。これは、従来燃やされたり埋め立てられていた古紙を、貴重な資源ととらえ製紙原料としていかにリサイクルに回すかを

主眼に、原料政策を根本から見つめ直し、古紙、板紙、段ボールの三位一体での改革を進め、持続可能なリサイクルシステムをつくりあげていこうというものだ。

2つ目が、「TCO (Total Cost of Ownership ship)」である。これは、価格政策の重要性を説き、おのこの経営者がオーナーシップを発揮して、トータルコストをしっかりと売価に反映していこうということだ。

3つ目が、「Corrugated Of Course!」で、これは高機能で低コスト、環境にも優しい三拍子そろった段ボールの優位性をあらためて訴えるキャッチフレーズとして、段ボール業界の地位向上を目指し掲げられている。

どこかで聞いた議論だと思っていたが何のことはない、いずれもわれわれ日本の段ボール業界が、10年以上も前から進めてきた改革そのものではないか。そういえば何年前かに国際段ボ

ール協会の会長をしていた時の総会で、日本での業界改革の状況を欧米の経営者の前で披露したことがある。今彼らはその重要性に気づき、同じことを始めようとしているのだ。

これまでの日本の取り組みが間違いではなかったと再認識するとともに、日本の段ボール業界が世界をリードしている現状は誠に嬉しい限りだ。世界の日本の地盤沈下がいわれて久しいが、日本という国が、「本当は強い日本」として、私たち一人ひとりが自立と自律の精神で矜持を持ち世界に向かっていけば、その未来は決して悲観的になる必要はない。要は心の持ちよう、気概の問題である。

なお、いささか手前味噌になるが、当社ではこのたび「防災段ボール」を開発した。耐水性は随分昔に克服していたが、火は無理だと思っていた。しかし技術陣の努力でブレイクスルーすることができた。こんなところでも日本の段ボールは世界の先頭を走っている。

本連載は、大坪清、海田万里、北川正恭、茂木友三郎、清田瞭、平沼越夫の各氏が担当します